

プロジェクトマネージャー：岡 瑞起（筑波大学 システム情報系 准教授）

1. プロジェクト全体の概要

今年度から PM として就任した。初年度である 2021 年度は、集合知に関する提案を 1 件、身体性を活用した提案を 1 件、合計 2 件のプロジェクトを採択した。

プロジェクト採択にあたっては、次の 4 つの観点から評価を行った。

- 実行可能性：提案内容を実現するために必要な技術力を持っているかどうか
- 新規性創出：新しい価値観や生活様式をもたらすかどうか
- コミュニケーション力：提案内容や作ったものを他の人に伝えるためのコミュニケーション能力を有しているかどうか
- 熱意：提案者の強い熱意の基づいているかどうか

採択した 2 つのプロジェクトは、育成期間中に Web アプリケーションやスマートフォンアプリとして公開することができた。また、プロジェクト終了後も継続する方向性が示され、今後につながる成果が出せたものと考えている。

2. プロジェクト採択時の評価（全体）

上記の 4 つの観点から各プロジェクトを総合的に評価し、2021 年度は下記 2 件のプロジェクトを採択した。

(1) 服のサイズ感がインタラクティブに分かる AR 試着モバイルアプリケーション

姿見に映る自分の姿をスマートフォンで撮影し、AR で試着している様子を表現するというアプリケーションの開発を行うプロジェクトである。AR に限らず XR を活用した服の試着は、服の EC 化が進む中、注目されている技術である。競合も多く、技術的なハードルも高いチャレンジングなプロジェクトであるが、既存技術の state-of-the-art を組み合わせとインタフェースの工夫で、使える技術となるのではないか、という期待を込めて本提案を採択した。

(2) チャット型インタフェースを用いた集団発想法支援ツールの開発

複数人でアイデアを出す集団発想を支援する、ブレインストーミングツールの開発を行うプロジェクトである。もともとは対面で行われることが多かったブレイ

ンストーミングだが、With コロナ社会において、「Miro」や「MURAL」といったオンラインホワイトボードツールに代表されるオンラインツールを用いたブレインストーミングが盛んに行われるようになった。本プロジェクトで提案されている、チャット型は、既存ツールで用いられている「付箋」というアナログの概念をそのままデジタルに持ち込んだインタフェースよりも、よりオンラインでのコミュニケーションに適している可能性がある。また、ブレインストーミングを効果的に行うためには、発言を促したり、出されたアイデアをまとめたりする、進行役の役割が重要となる。ユーザが進行に不慣れてでも、ツールが進行を補助する機能をもたせることで、誰でも手軽にブレインストーミングが行えるようになる、というユーザに寄り添った視点での提案を評価し、本提案を採択した。

3. プロジェクト終了時の評価

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、主にオンライン会議システム Zoom とオンラインチャットシステム Slack を活用し、クリエイターや他の PM との議論を行った。月 1 回の PM ミーティングを実施し、他の PM との合同ミーティングも適宜行った。その他、プロジェクトごとに必要に応じて、有識者からのフィードバックを得るためのミーティングを実施した。合同 PM ミーティングで、多様なバックグラウンドと視点を持った PM からのフィードバックは、非常に効果的であった。また、他のプロジェクトの進捗具合や進め方を知ること、クリエイターにとって良い刺激になっていたようである。また、ミーティングを重ねる度に、プロジェクトの目的やチャレンジを分かりやすく説明する能力も確実に向上した。

採択した 2 件のプロジェクトは、ひとつは、誰でも気軽に行えるブレインストーミングを目指した Web アプリケーションの開発、もうひとつは AR 試着が行えるスマートフォンアプリの開発であり、ふたつのプロジェクトの間には一見、接点がないように思われた。しかし、開発が始まると、両プロジェクト共に、ユーザテストを実施し、そのフィードバックを開発に反映するという形で開発が進んだ。そのため、ユーザエクスペリエンスという視点からそれぞれのプロジェクトで得た知見が、活発な議論へとつながった。

また、技術的な困難に何度もぶつかりつつも、試行錯誤を何回も繰り返し、プロジェクト提案書が提出された時点で PM が想像した成果をはるかに上回る成果を上げることができた。実際に開発を進める中で、当初開発する予定であった機能のうち、いくつかは最終的な成果物には盛り込まれなかった機能もあるが、より有用性の高い機能が代わりに組み込まれた。アプリケーションとしてリリースされ、多くのユーザに使われることで、今後の更に発展していくことを期待したい。